
百万図書館

凸凹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

百万図書館

【Nコード】

N5523BA

【作者名】

凸凹

【あらすじ】

H×Hのアニメをちよろつと見ていたら、HDDから出てきたので晒してみます。設定はとてつもなく適当なうえ、なんの予備説明もないですがそれでもよろしければどうぞ。

念能力は「図書館」な女主人公の話。能力とか超適当。すいません。不勉強です。

深い碧眼が文字を追いかける。

あるときは上から下へ、あるときは右から左へ。

その動きは止まることなく、眼球は常に運動を急かされる。

ぱらりぱらり頁をめくる手が緩まることはなく、今日もまた、三冊の書物が読破され、まったく同じものが机の上に『複製』される。

「お疲れ様です、主」

「ああ、ありがとうデイルムツド」

手渡されるのは紅茶。

薫りを楽しみ、口をつける。

その間に、デイルムツドと呼ばれた黒髪の青年は、三冊の複製を手にとる。

「確か、予約が入っていたとムーディが言っていましたね」

「そ、じゃあいつも通りお願い」

デイルムツドは軽く頭をさげ、部屋を辞する。

「ああ、主。一時間は休憩を取ってくださいね」

扉を閉める直前に、にこり、と女性が黄色い悲鳴を上げそうな顔でそうお願いする従者。そんな従者の台詞に、主は顔を顰めた。

彼女、シエスカ・ランブルにとって、読書は何事にも変えがたいものであるのだから。

貸本屋『百万図書』。

世界でも有数のレアな書物を取り扱う知る人ぞ知る穴場中の穴場世界屈指の蔵書量を誇る大図書館でも取り扱いはないような書物が、さも当然のように本棚にそろえられている姿を見て、あまたのマニアが涙する姿が見られる、そんな本屋である。

こじんまりとした店構えであるというのに、どこにそんな本を扱うことができるのかと疑いたくなるほどの蔵書量を誇るその場所で、一人の男がせつせと本を並べていた。

「ムーディ、予約の本だ」

「あ…デイルムツドさん」

奥から声をかけられたムーディはびく、つと肩を強張らせ、こわごわと青年から書物を三冊受け取った。いい加減気配なく後方に立つのはやめてくれないだろうか、と思うが、怖くていえないう。

「ありがとうございます」

「いや。シエスカ様がいつも通り扱えとのことだ」

「はい」

ムーディは書物を片手に予約表を開き、電話をかける。

その間、店番するのはデイルムツドの役目だ。

店主であるシエスカは、従者の言うことを聞いているなら休憩をとっているはずだが、あの主が目の前に餌（本）があるのにだまっと言うことを聞いているかは疑問の残るところではある。あるが、彼は従者として主を信じることにした。

番台に腰掛、店内を睥睨する。

店内にいる客は一般人と、そうでないもの。

大図書館にもないようなレアな書物を取り扱う店に、善良な人間だけが出入りするとは限らない。

その本を売却し、富を得ようと凶器を持って入店してくる愚か者も後をたたない。譲ってくれ、といいながら断れば凶行に走るマニ

アも中にはいる。

とくに、「この世界」には凶悪な能力を持つ者もいるので注意が必要だ。

本に被害が及ぶだけならまだいい。それは『どうにでもなる』。ディルムツドが危惧しているのは、彼の主に累が及ぶことだ。自分の守護する彼女に万が一でもあつては困る。それを事前に防ぐのも、彼の役目だった。そして、それを実行する実力も、彼はもっていた。

つつかつかと、一人の男が入店してくる。他の客が、熱心に本に視線を寄越しているなかで、それらに見向きもしないさまは、この店では特に異常に映る。

手をポケットに入れ、ディルムツドに視線を寄越し

「やあ、予約の本、受け取りにきたよ」

ポケットから手を出す寸前、それを横合いから出てきた男によつて防がれ神速の裏拳が決まり、男はその場で崩れ落ちた。

「うは…早いですね、ルシルフルさん…」

ムーデイが、今まさに電話をかけていた相手が、ニコニコと人好きする笑顔で、崩れ落ちた男を足で隅に寄せる。

「近くにたまたまいたんだ」

「そうですか…」

ちらり、とディルムツドを見ると、小さく頷いたのを見て、ムーデイは本を三冊、ルシルフルと呼んだ客に手渡し、代金を受け取る。客はその場でぱらぱらと頁をめくると、感嘆の息をつく。

「本当にアルセリア滅亡期のものだ…相変わらずどこから手に入れるんだか…」

「それは店主に聞いてくださいよう」

ムーデイは困ったように頬をかいた。本の入手手段については、

彼はまったくノータッチだからだ。

「ねえ、彼女いないの？」

ルシルフルは、番台で相変わらず店内を見渡している美丈夫に声をかける。鋭い眼差しが、ゆっくり向く。

「今、休憩中だ。さつさと失せる盗人」

「酷いな、今はちゃんと客なのに。自分でいうのもなんだけど、俺上客じゃない？」

「ほざけ」

二人のやり取りを見て、ムーディはぶるりと身震いする。

恐ろしいほどのブリザードだ。

ムーディは彼らふたりがとても強いことを知っている。

だからこそ、ルシルフルが（多分）強盗に攻撃しても、慣れてしまっているので驚かすに対応することができた。このやり取りは以前にもあった。

そして、この二人が険悪なもの、よく知っている。

ムーディはただのアルバイトで、詳しくは知らないが、シエスカとデイルムツドは主従関係にあるのだという。デイルムツドは昔天空闘技場で二つ名がつくほど強い闘士で、二百階目前まで行ったが開店資金が集まったからとすっぱりやめて天空闘技場を後にしたとか。そのまま二百階まで進んでフロアマスターになれば、その名を世に知らしめることができるというのに、そこまでして彼はただ彼女に尽くしていたらしい。らしい、というのは、昔ムーディが好奇心からシエスカに聞いた話だからだ。それがどこまで本当なのか、それは彼も知らない。シエスカは自分にはデイルムツドは勿体無さ過ぎるといつていた。話をきくと、たしかに、それほどの闘士をたかが貸本屋の店主が従者にするなど驚き以外のなにものでもないのだが、ムーディは知っている。彼、デイルムツドは心の底から主人に仕えることだけを使命にしていることを。

だからこそ、二人の仲は険悪なのだ。

昔、この店舗に押し入り、店主を殺害して本を奪おうとした盗人のクロロ・ルシルフル。

昔、その盗人に瀕死の重傷を負わせた従者。

昔、それを、許してしまったこの店の店主。

「ああ、予約って君だったの」

「やあ、シエスカ」

ひょっこりと、店の奥からこの店の店主である女が顔を覗かせる。

「ルシルフル。デイルムッド。他の客がびっくりするから店内で吹雪吹かせないで…ムーディそこの伸びてる男、適当に捨ててきて」「は、はい!」

ムーディは言われたとおり、気絶している男を引きずって店の外に捨てた。これはこの店の日常茶飯事だ。店内の誰も気にしない。

番台のまわりでは、三人が会話を始めている。

言いつけ通り、ふたりとも妙な威圧感は抜けている。

「アルセリア滅亡期って…たしか大図書館も三巻までしか取り揃えてなかったよね?」

「今更じゃない?」

「まあそうなんだけど…気になるんだよなあ」

「しつこいぞ盗人」

「それやめてくれる?」

「ちなみに前に君が好きだといっていた、ルールブル著の秘蔵書が見つかっただが…」

「是非お願いします。お金は払うよ」

「金を払うのは当然だ」

うん、いつも通りだ。

ムーディはお茶をいれようと、店の奥へ姿を消した。

(後書き)

補足な説明

シエスカ・ランブル

二十代の癖毛の女性。

貸本屋『百万図書』の店主。

無表情。巨乳。

ありとあらゆる書物を取り扱うマニアよだれものの書店店主にして転生者。

自分で戦う？ありえない。とりあえずいいから本寄越せ。という感じで転生を果たす。

それゆえの護衛、それゆえの能力。

シエスカは、極度のビブリオ・マニアであったのでありとあらゆる書物を手に入れる能力を手に入れる。それをコピーして書店に並べている。

本が読めればそれでいい。

念能力『百万大図書館』

シエスカのすべてのメモリを使ってでも達成させたかった能力。

彼女の感知できる世界のすべて（時空関係なし）の書物に触れることができ、それをコピーすることができる。

彼女が書店に並べている本は全部これ。

この能力によって作られた本は中身は本物であるがコピーであるため、彼女の手から離れると七日でその効力を失い、失効する。盗難防止にも一役買っている。ちなみに戦闘能力は皆無。

デイルムツド・オディナ

シエスカの護衛としてそばに仕える槍騎士。

みんなご存知 fate 聖杯戦争四次のランサー。

神速の騎士。魔性の騎士。びつくり美形。

シエスカが自分で戦いをする人ではないので護衛として誰かを見繕つてと『カミ』が言われたときに名乗りを上げた。今度こそ主に仕えきたいという願いゆえ。

シエスカに従順に従う。彼女も自分のような人間に仕えてもらって悪いな・・・と思っているので、彼のために彼の望む『主』を演じている。関係は良好。

この世界には神性とかないので彼はチート。

ちなみに、書店の開店資金は彼が天空闘技場で稼いだもの。当時は女性の黄色い声援が常に闘技場を包み、多くの男性たちからは妬まれている。しかし実力は折り紙つきなので純粹に戦いたいかかつこいいとか思つものも多数いた。

ムーディ

『百万図書』のアルバイト。

シエスカがまったく仕事しない(ずっと本読んでる)のでほとんど彼がこの店を切り盛りしている。

一般書の買い付けは彼がしている。

元は浮浪者でぼろぼろだったところ、店舗に盗みに入り、デイルムツドにつかまる。が、シエスカが丁度アルバイト欲しがっていたので餌を与えてちゃんと雇っている。彼女に恩義を感じちゃんと店

番している。

レア本欲しさに馬鹿が襲ってきても抵抗せずそのまま好きにさせるか、デイルムツドを呼ぶ。じゃないと死ぬくらい一般人。そばかすに金髪。デイルムツドのそばにいるのは今でも怖い。クロロが旅団員とは知らない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5523ba/>

百万図書館

2012年1月15日01時48分発行